

## 芹沢俊介\*：本州産ホソバコケシノブ属の 1 新種

Shunsuke SERIZAWA\*：A new species of *Mecodium*  
(Hymenophyllaceae) from central  
Honshu of Japan

コケシノブ科のシダ植物の中で、ホソバコケシノブ属 *Mecodium* は細く長くはう根茎、通常全縁の裂片、あまり肥厚しない細胞壁、二弁状の包膜、短い孢子のう床などで特徴づけられる一群である。この群は新旧両熱帯を中心に広い範囲に分布しており、全世界で 100 種ほどが知られている (Copeland 1947)。

中井 (1926) は日本のコケシノブ科植物についてまとめた際に、琉球列島を含む日本産のこの群の植物としてリュウキュウコケシノブ、ヤクシマコケシノブ (オニコケシノブ)、オオコケシノブ、フジコケシノブ (ヒメコケシノブ)、キヨスミコケシノブ、コケシノブ、ホソバコケシノブ、ホソバヒメコケシノブの 8 種をあげた。このうち、ヤクシマコケシノブとオオコケシノブ、ホソバコケシノブとホソバヒメコケシノブは、今日では一般に同種と考えられている。一方、この他の種類としては、ミヤマコケシノブ *M. crispatum* が九州高隈山から (岩槻 1958)、チデレコケシノブ *M. crispato-alatum* が沖縄から (初島・天野 1967) 報告された。しかし、前者のもとになった標本 (田川・岩槻 1039, KYO) は、オオコケシノブ (ヤクシマコケシノブを含む) *M. badium* の中にも時にやや縦長で全縁の包膜を持つ個体があるので、少なくとも種としてはそれに含まれるものと思われる。後者は報告を裏付ける標本が、鹿児島大学にも琉球大学にも、あるいは他の日本の主要標本室にも見当らない。ところが愛知県と岐阜県の低山地には、特徴的な包膜を持ち、上述のいずれの種類とも異なる本属の 1 種を産する。

コケシノブ科のシダ植物は、体制が簡単なだけに変異の幅が大きい種類が多い。特にホソバコケシノブ *M. polyanthos* には、葉身の長さが 15 cm 以上になる大型のもの、逆に 1 cm くらいでもよく孢子のう群をつけている小形のもの、葉身が幅広く三角状卵形のもの、細長く披針形のもの、葉柄がやや太くて斜上するもの、細くて樹幹や岩から垂下するもの、葉柄の下部にまで翼が発達するもの、葉柄がほとんど無翼のものなど、さまざまな型の個体が見られる。しかし、少なくとも日本産のものでは、孢子のう群が散在してつくこと、包膜が卵形～広楕円形で全縁であることが共通の特徴である。

ところが問題の種類 (図 1) は、包膜が三角状卵形～広披針形、長さ 1.3-2 mm、幅

\* 愛知教育大学 生物学教室, Department of Biology, Aichi Kyoiku University, Kariya-shi, Aichi 448.

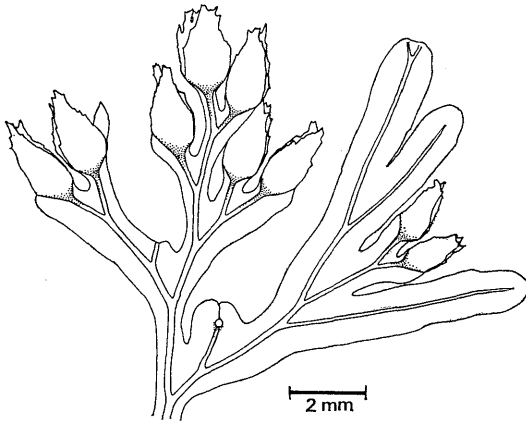


図1. ミカワコケシノブ *Mecodium mikawanum*  
(芹沢30765, 葉身の先端部)。

0.5-1 mm で、辺縁に欠刻状の著しい歯牙があり、時には不規則に二裂することもある点でホソバコケシノブからはっきり区別される。胞子のう群は葉身先端部にまとまってつき、しかも胞子のう群のつく羽片は著しく縮小してせいぜい1-2回分枝するのみになるので、よく胞子のう群をつけた葉では葉身先端部が穂状になることもはっきりした特徴である。葉柄は細く、長さ1.2-3 cm、翼はほとん

ど発達せず、ある場合でも先端部に僅かにつく程度である。葉身は中上部が2回羽状、下部は一部3回羽状に切れ込み、長さ3-5.5 cm、幅1.3-3 cm、胞子のう群をつけない葉では楕円形〜長楕円形であるが、胞子のう群をつけた葉ではしばしば倒卵形となる。中軸の翼は平面的で波打たず、葉身下部ではあまり発達しないことが多い。裂片は比較的狭い角度(25-50°)で分岐し、やや長くのびて7 mmに達し、中肋は暗色でよく目立つ。胞子のう群が葉の先端に集まってつく点では、日本及び朝鮮半島のヒメコケシノブ *M. coreanum* やフィリピンの *M. paniculiflorum* に似ているが、これらの種類とは包膜が細長く、辺縁に欠刻状の歯牙があること、裂片が細長いことなどで異なる。また、ヒメコケシノブは胞子のう群のつく部分が穂状にならないので、この点でも区別できる。裂片が細長く狭い角度で開出する点ではコケシノブ *M. wrightii* にも似ているが、それとは胞子のう群のつき方と包膜の形状が全く異なる。包膜の形状は東南アジアの *M. productum* に似ているが、この種類はずっと大形で胞子のう群は散在してつき、葉柄には翼が発達するので、同一種とは思われない。

本種ははじめ1970年8月に岐阜県美山町神崎で採集し、気にかけていたものであるが、その後1979年10月になって愛知県旭町で大きな群落を発見し、良好な資料をたくさん得ることができた。基準標本には、この旭町産の標本(芹沢 30765)を選定する。後述の記載も旭町産の標本からとったものである。美山町産の資料は裂片がやや幅広く1.5mm以上になることがあり、裂片の開出する角度もやや広い傾向があるが、別の分類群とは思われない。生育環境は、旭町の場合は沢沿いの陰湿な場所にある岩の側面に一面に着生していたが、美山町では道路沿いの比較的明るい岩上に着生していた。また犬飼清氏

は、最近愛知県富山村日本ヶ塚山でも本種を採集された。現在のところ判明している産地はこの 3ヶ所だけであるが、注意してさがせばおそらく静岡県西部の天竜川流域などでもみつかるものと思われる。なお、和名は基準標本産地に因み、ミカワコケシノブと命名する。

**Mecodium mikawanum** Serizawa, sp. nov.

A *M. polyanthos* soris ad apicem laminae aggregatis, indusiis triangulate ovatis vel late lanceolatis margine laceratis differt.

Filix sempervirens epilithica. Rhizoma gracile 0.15-0.2 mm diametro late repens; frondibus a se 0.7-1.8 cm remotis. Stipes gracilis 1.2-3 cm longus ca 0.2 mm diametro, exalatus glaber. Lamina elliptica, anguste elliptica vel obovata 3-5.5 cm longa 1.3-3 cm lata apice obtusa vel rotundata bipinnata vel partim tripinnata; ala rhachidis plana inferne minus conspicua; pinnis 4-8-jugis a rhachidi sub angulo 25-50° divaricatis, inferioribus reductis, mediis maximis ovatis vel anguste ellipticis usque 3 cm longis 1.2 cm latis apice obtusis vel rotundatis; lobis ultimis 0.8-1.3 mm latis elongatis usque 7 mm longis apice rotundatis margine integris venulis fuscatis; parietibus cellularum laminae non undulatis; pinnis superioribus saepe fertilibus, pinnis fertilibus conspicue reductis non vel 1- vel 2-pro ramosis usque 6 mm longis. Indusia bivalvata triangulate ovata vel late lanceolata 1.3-2 mm longa 0.5-1 mm lata apice acuta margine lacerata raro irregulatim lobota.

Hab. Honshu. Pref. Aichi: Mt. Nihongatsuka-yama, Tomiyama-mura (K. Inukai 4943, Sept. 20, 1981, AICH<sup>1)</sup>); Shishinado-gawa, Asahi-cho, alt. ca 400 m (S. Serizawa 30765, Oct. 28, 1979, AICH—holotype). Pref. Gifu: Kanzaki, Miyama-cho, alt. ca 220 m (S. Serizawa 12196, Aug. 2, 1970, AICH); ibid. (S. Serizawa 29913, July 22, 1979, AICH).

### 引用文献

Copeland, E. B. 1947. Genera Filicum 33. 初島住彦・天野鉄夫 1967. 改訂沖縄植物目録 4. 岩槻邦男 1958. 植物分類地理 17: 65-72. 中井猛之進 1926. 植物学雑誌 40: 239-275.

<sup>1)</sup> AICH: Herbarium of Aichi Kyoiku University.